

平成26年 酒田出身の人物 展示人物一覧

展示期間：平成26年1月4日～12月28日（2階常設展示室）

あべ よのすけ
阿部 与之助（北海道開拓者）天保13年（1842）～大正2年（1913）



札幌市公文書館提供

飽海郡北俣村（旧平田町）に生まれる。

生家は貧しく、明治3年（1870）、単身北海道に渡る。漁夫などの仕事に就き、両親に仕送りをしながら、農業を始めるための資金を貯めた。

明治8年、白石村（※）で大麻（※）の栽培に取り組むが、洪水に遭い失敗。しかし同年、隣村の豊平村（※）と札幌の間を流れる豊平川に橋がかかると、河畔に小さな飲食店を開く。店は人の往来の増加により大繁盛する。

その後も勤勉と節約に努めて財力をつけ、開墾事業や造林事業に尽力。所有地は140余町歩に及んだ。明治維新により社会が著しく変化するなか、苦しい生活を送っている郷里の人々を救いたいと、63戸の移住者を呼び寄せて稲作に当たらせている。

地区の伍長や村総代人を務め、常に村の先達として働いた。道路の改良、学校の増改築、用水路の整備などの公共事業に私財を投じ、「豊平村の開祖」といわれた。

※白石村・豊平村…現在は札幌市 ※大麻…漁網や縄などの繊維製品の材料に広く使われた。

てっぽうや きさい
鉄砲屋 亀齋（指物師）文久3年（1863）～昭和2年（1927）



十王堂町（現在の酒田市二番町）に生まれる。本名は鈴木浅吉。鉄砲屋は屋号、亀齋は雅号。

若いころから器用で、指物を習得して生業とした。時期ははっきりしないが、神経痛を患い足腰が不自由になってしまう。しかし、このころから天賦の才を発揮し始めたといわれている。

仕事は、座ったままで作ることでできた小タンス、小机、硯箱、飾り台、糸巻きなどの製作に限られたが、その作品は、家具の実用性と美しさを兼ね備えていたという。後に国立博物館から近代木工界の「三齋」の1人として、高く評価されたと伝えられている（あとの2人が誰かは分かっていない）。

亀齋の通い弟子でもあった名人・齋藤兼吉とともに、当時の酒田指物界の双璧をなし、「箱物は鉄砲屋、棚物は兼吉」といわれた。

小松 林蔵（実業家・篤志家）文久3年（1863）～昭和5年（1930）



一條村前川（旧八幡町）に生まれる。

幼いころから勉強熱心で、18歳で小学校教員になるが、志を立て徒歩で上京。明治17年（1884）、東京専門学校（現在の早稲田大学）に入り、同19年にイギリス法律学校（現在の中央大学）に転学し卒業する。

明治23年、東京火災保険株式会社に入社し、大阪・仙台・名古屋支店長などを歴任後、常務取締役となり、亡くなるまで勤め続けた。明治41年には、安田財閥の安田善次郎に見込まれ、東京建物株式会社の中国・天津支店長に抜擢。天津日本専管居留地の経営にあたり、学校や住宅などの施設整備に当たっている。

「産湯を使わせてもらったところに感謝するのは当然で、これが人間として第一なのだ」と話し、愛郷心、信仰心に厚かった。自ら千円の基金を拠出して前川奨業財団を設立。地元の一線小学校などの教育機関や神社仏閣などへ、惜しみなく私財を寄付した。

こうりき なおひろ
高力 直寛（織工技術者）慶応元年（1865）～昭和12年（1937）



松山文化伝承館提供

松山藩士・屋代敬兵衛の四男として松嶺町（旧松山町）に生まれ、高力家の養子となる。

明治15年（1882）、17歳の時に単身で群馬県山田郡桐生町（現在の桐生市）に行き、織物技術を学ぶ。早くも修業2年目で実力が高く評価され、群馬県より職工技術で一等賞を授与される。

明治19年、京都西陣で、当時の最新織機だったジャガード機による職工技術を学ぶ。翌年、福井県の「職工会社」に招かれ、日本の輸出品として人気の高かった「羽二重」の製法を伝授する。福井では、この技術講習会をきっかけに羽二重の生産を開始し、桐生をしのぐ繊維王国となった。

その後、東京高等工業学校（現在の東京工業大学）教授、群馬県立織物学校（現在の群馬大学工学部）や京都市染織学校（現在の京都市立洛陽工業高等学校）の校長を歴任。職工技術者の教育に力を注いだ。

やじま じゅんきち
矢島 純吉 (海軍中将) 慶応元年 (1865) ~大正13年 (1924)



本町の根上家に生まれ、鵜渡川原村 (現在の酒田市亀ヶ崎) の教育者・
矢島 晁英^{ちやうえい}の養子となる。

明治19年 (1886) に海軍兵学校を卒業し、同21年1月に海軍少尉に任官する。累進して明治38年に海軍大佐となり、日露戦争 (1904~05) では、第十九艇隊司令、次いで第二駆逐隊司令として旅順港閉塞に参加。功三級金鵄勲章を授与された。

舞鶴水雷団長を経て、大湊要港部参謀長、呉海兵団長、戦艦・安芸艦長、横須賀海兵団長兼壱岐艦長などの要職を歴任する。

日清戦争 (1894~95) では水雷艇攻撃隊長として活躍しており、水雷砲術の権威といわれていた。明治44年には少将となり、水雷学校長を務めた。大正4年 (1915)、中将となり予備役編入となる。

やまだ げんたろう
山田 玄太郎 (農学博士) 明治6年 (1873) ~昭和18年 (1943)



鳥取大学農学部同窓会提供

本町に生まれる。

山形尋常中学校 (現在の山形東高校) に進学するが、父親の北海道移住に伴い、札幌農学校 (現在の北海道大学農学部) 予科に入る。明治31年 (1898) に本科を卒業し、同校助教授になる。

明治36年、盛岡高等農林学校 (現在の岩手大学農学部) の創立とともに、植物学・植物病理学教室の初代教授として赴任する。在職中、ドイツ、イギリスなどへ留学し、大正8年 (1919) に農学博士となった。

大正10年、鳥取高等農業学校 (現在の鳥取大学農学部) が創設され、初代校長に任命される。温厚で、学生の自主性を重んじた教育方針は、自由で学究的な学風の礎となり、鳥取市民の尊敬を集めた。昭和11年 (1936) の退官後は、札幌に移住し、北大教授となった。

赤星病菌の分類学的研究で大きな成果を上げ、「植物病理学の泰斗」と称された。

たんば つねお
丹波 恒夫 (貿易商・浮世絵収集家) 明治14年(1881)～昭和46年(1971)



新片町(現在の酒田市幸町)に生まれる。

明治34年(1901)、立教学院英語専修学校(現在の立教大学)に入るが中退し、日露戦争に出兵。その後、帰省し、酒田郵便局、新庄中学校などに勤務する。

明治40年に渡米。英語、経済学などを学び、後に百貨店に勤めて、欧米の絹布・雑貨などの研究、日本の絹織物市場調査を行い、大正2年(1913)に帰国する。同年、横浜の大和商会に入社し、数回にわたり世界各国を訪れて市場調査を行う。同13年、横浜に丹波商会を設立し、日本の輸出貿易の振興に貢献した。

太平洋戦争では空襲のために社屋を失うが、戦後、連合軍総司令部繊維部顧問などを務め、会社を再建する。豊富な学識経験をもとに、日本の貿易再興に尽力した。

浮世絵コレクターとしても名高く、若いころから浮世絵の国外散逸を憂えて、長年にわたり収集した。約6,000点のコレクションを神奈川県立歴史博物館に寄贈した。

いしわた
石綿 さたよ (社会事業家) 明治30年(1897)～平成元年(1989)



松山文化伝承館提供

松嶺町(旧松山町)に生まれる。

大正初期に、仙台在住の叔父の家に行儀見習いに行き、大正7年(1918)に仙台高等女学校(現在の仙台白百合女子大学)を卒業する。叔父の世話で東京・駿河台の病院で看護婦見習いになる。

大正15年、石綿金太郎と結婚。夫婦で経営した石綿商店が、書籍の装丁用の織物を扱う事業で成功を収める。昭和14年(1939)ころ、二女が小学校に入り、校外生活指導を始める。

太平洋戦争終結後の昭和20年、知り合いが男児を連れてきたのをきっかけに、「戦災孤児救護婦人同盟」を設立し、戦災孤児を自宅で保護。翌年、「愛児の家」と名付け、同23年からは戦災孤児以外の子どもも収容する。

昭和55年、名誉都民に選ばれ、愛児の家をモデルにしたテレビドラマも放送された。生涯で育て上げた子どもは1,000人を超えるという。